



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響(8) : 男性の子育て参加
Author(s)	田村, 毅; 倉持, 清美; 岸田, 泰子; 木村, 恭子; 及川, 裕子
Citation	東京学芸大学紀要. 第6部門, 技術・家政・環境教育, 56: 41-45
Issue Date	2004-11-30
URL	http://hdl.handle.net/2309/2990
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (8)

—男性の子育て参加—

田村 毅*・倉持 清美*・岸田 泰子**
木村 恭子***・及川 裕子****

生活科学

(2004年7月30日受理)

TAMURA, T., KURAMOCHI, K., KISHIDA, Y., KIMURA, K., OIKAWA, Y. : The impact of child rearing experience on the parental growth and marital relationship (8) : Men's participation in child rearing. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Sect. 6, 56: 41-45 (2004) ISSN 1341-1705

Abstract

The eighth part of the serial research focuses on men's participation in pregnancy, child birth, and child rearing during the first three years of being parents. The younger generation seems to be more flexible in their gender role division between the couple, and men are more willing to participate in child care than previous generation. We set a hypothesis that men's active participation would strengthen their marital relationships.

We conducted three follow-up quantitative questionnaire surveys. Subjects were married couples (matched pair of men and women) in their first pregnancy. The survey was conducted four times so far; during pregnancy, when a child is around four months old, one year old, and two year old. The result was statically analyzed.

The male subjects of the survey showed high expectation in childcare during pregnancy. The result will be further analyzed in the points like 1) transition of male participation in daily child care and chores, and 2) the relationships between the quality of marital relationship and men's participation. Recommendations for young couple will be introduced to secure good marital relationships. (in Japanese)

Key Words : child rearing, parental growth, marital relationship, men, father

Department of Home Economics, Tokyo Gakugei University, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

はじめに

子育てにおける父親の役割の重要性は、多くの研究

者によって指摘され続けてきた。子育てを母親ひとりに任せるのではなく、父親が関わることで、より効果的な子育てが実現されることはいわば自明である。いまだにこの種の研究が盛んであることは、男性の必要

* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

** 島根大学

*** 共立女子短期大学

**** 埼玉県立看護大学短期大学部

十分な子育て参加が果たされていないことを示している。

2003年のわが国における合計特殊出生率は1.29であり、少子化の進行が社会に大きなショックを与えている。しかし、この現象は日本ばかりではなく、アジア地域にも共通した現象で、最近の統計によると香港が0.94、台湾が1.24、シンガポールが1.25、韓国は02年の統計で1.17と、日本以上に少子化は深刻である(朝日新聞, 2004)。

少子化対策ばかりでなく、いかに子育て中の家族が、健やかな子育てを実現できるかという一つのポイントは、父親の積極的な家事・育児参加であることは言うまでもない。20世紀後半のジェンダー革命は、女性のライフスタイルに大きな変革をもたらし、従来の性役割に基づいた家庭内のみの役割から、家庭外(社会)での役割を担うようになってきた(Shim, 2004)。しかし、そのジェンダー革命は男性には十分に届かず、相変わらず社会(家庭外)の役割がメインであり、家庭内の役割を十分に果たせる状況ではない。男性が、例外なく、子育てに参加できるような社会、また、それを実現できる家族関係、あるいは、男性自身の意識変革が、これからの21世紀に求められる。

本研究プロジェクトでは、2001年より出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響について研究を深めてきた。

この報告では、特に男性の子育て参加に焦点を当てる。男性の出産・子育て参加が、夫婦関係にどのような影響を与えるかという点に絞って考察を進める。仮説として、男性の子育て参加が夫婦関係に好ましい影響を与えると予想される。

本研究プロジェクトは上記の研究目的を達成するためにさまざまな研究手法を組み合わせている。中心となるのは夫婦それぞれに対する質問紙調査である。これは、三件法、四件法などによる選択式の質問項目と自由記載から構成されている。それに補足する形で面接調査を行い、質問紙では得られなかった個別の情報を得る。また、子育て相談活動を通して、具体的に悩みや問題を抱えた事例を支援する中で妊娠・出産・子育て期における夫婦関係や子育ての問題点について明らかにする。さらに、子育て教室や親子広場などの子育て支援活動を通して、支援するという具体的活動の中から両親や子どもたちの現状とその問題点に迫る。

研究方法

第1回調査の対象者は、第一子を妊娠中の夫婦であ

る。調査は、関東、および近畿・中国四国地方の医療機関(病院産婦人科・産婦人科医院)、および保健機関(保健センターなど)に依頼した。それぞれの機関において、診察時、あるいは母親学級・両親学級などの機会に対象者に調査票一組(夫票、妻票)を直接手渡し、郵送にて直接回収した。その際、夫婦間のプライバシーを保つため、夫票・妻票をそれぞれ小封筒に入れ、両者を合わせて返信用封筒に封入するよう依頼した(第二回以降の調査も同様)。6289組の夫婦に依頼し1841組の回収(回収率29.3%)を得た。

第2回・第3回調査は郵送により配布・回収した。第1回調査を返送し、以降の調査に協力を得られた対象者に対し、郵送にて調査を依頼した。第2回調査は出産後4ヶ月、第3回調査は出産後1年を目安に調査票を発送した。

調査項目の内容は次のとおりである。

- (1) Demographic dataとして年齢、就労状況、女性の職場復帰(第3回のみ)、夫の帰宅時間(第1回)、同居家族(第1回)。
- (2) 妊娠・子育ての経過として、妊娠中の経過(第1回)、出産前後の様子(第2回)。
- (3) 夫婦関係として、夫の家事・育児参加、夫婦関係の満足度、夫婦間の気遣い、3つの夫婦関係尺度(Quality Marital Index, Marital Love Scale, Dyadic Adjustment Scale)。
- (4) 子どもの成長として、子どもへの愛着感情、子育て不安(第3回)、子どもへの接し方(第3回)。
- (5) 生活状況として、現在の精神状態、自分とパートナーの生活の変化、出産・子育ての相談相手などである。

結果

まず、出産時の男性参加として、分娩時の夫の立会いの実態を検証する。実際に立ち会った夫は、全体の40.4%、立ち会わなかった夫は58.6%である。後者のうち、立ち会いを希望したが果たせなかったケースが17.9%、もともと、立ち会う予定はなかったケースが40.1%である。

第二に、父親の育児参加についての実態である。調査票では、具体的な育児項目として、子どもと遊ぶこと・あやすこと、食事を食べさせること・授乳、子どものしつけ、子守をすること、子どもを寝かしつけることなどを尋ねている。いずれも、同様のパターンとなったので、それらを代表して子どもの入浴と、子どものオムツを取り替えることについて詳しくみる。表

表1 男性の育児参加（女性からの評価と男性の自己評価）

（％）

	第1回調査（妊娠中）				選択肢 (2-3回共通)	第2回(生後4ヵ月)		第3回(生後1年)	
	女性の期待		男性の意気込み			女性	男性	女性	男性
	選択肢		選択肢						
子どもの入浴	たくさん期待する	44.8	たくさん関わる	66.6	たくさんする	51.3	52.6	45.3	46.1
	やや期待する	42.2	多少は関わる	29.8	時々する	33.2	32.4	35.8	38.6
	あまり期待しない	9.1	あまり関わらない	1.3	あまりしない	9.8	8.3	13.5	10.1
	全く期待しない	1.8	ほとんど関わらない	0.0	全くしない	4.9	4.9	4.7	2.8
	無回答	2.1	無回答	2.3	無回答	0.8	1.8	0.7	2.4
子どものオムツを取り替える	たくさん期待する	15.0	たくさん関わる	32.4	たくさんする	21.0	16.8	17.1	14.0
	やや期待する	53.4	多少は関わる	57.0	時々する	48.2	56.2	46.1	57.3
	あまり期待しない	24.1	あまり関わらない	5.7	あまりしない	20.2	16.1	23.3	18.4
	全く期待しない	5.4	ほとんど関わらない	2.6	全くしない	9.8	9.1	12.7	8.0
	無回答	2.1	無回答	2.3	無回答	0.8	1.8	0.8	2.3

1は、このふたつの育児行為、すなわち父親の入浴補助とオムツ替えについて、妊娠中・生後4ヵ月、生後1年の3回を通じて、夫婦それぞれから尋ねた。つまり、女性からは、妊娠中に出産後のことを予想して、どれほど夫に期待するか、また出産後は実際の夫の活動について評価してもらった。また、男性については、自分自身の子育て参加について、妊娠中に考えている出産後の予想について、また出産後は実際にどの程度やっているかという自己評価を依頼した。

その結果、子どもの入浴についても、オムツ替えについて、同様のパターンが認められた。第一に、妊娠中の男性の意気込みが高いことである。男性自身、子どもが生まれたら子どもの入浴に66.6%の男性がたくさん関わり、子どものオムツ替えについては32.4%が同様に答えている。一方、妊娠中の女性からの夫に対する期待は低く、子どもの入浴について44.4%の女性がたくさん期待しており、夫のオムツ替えについてたくさん期待している女性は15.0%に過ぎない。

出産後、実際、どの程度男性が子育てに参加しているかという評価については、男女の差は縮まる。出産4ヵ月の時点で、子どもの入浴に男性がたくさん関わっているという評価は男女とも51%～52%である。オムツ替えについて男性がたくさん関わっているという評価は男性自身が16.0%（生後4ヵ月）、および14.0%（生後1年）であるのに対して、女性からの評価はそれぞれ21.0%、17.1%であった。

これらの結果をまとめると次のようになる。出産の前には、男性自身の子育て参加に対する意気込みは高く、それに対して女性は醒めた目で眺めており、男性の働きに対してはあまり期待していない。実際に子どもが生まれ、子育てが始まってみると、男性の育児参加は、男性の意気込みと女性の予想の間である。むしろ、オムツ替えなどは、男性自身が評価するより女性のほうが高く評価している面もある。また、生後4ヵ月の時点に比べて、生後1年になると、子育て参加の割合は多少減っていることなどが明らかとなった。

第三に、男性の子育て参加と、夫婦関係の質について、両者の相関関係を明らかにした。3度の調査において、毎回、夫婦それぞれに夫婦関係を3つの尺度を用いて測定した。その結果、夫婦関係は、妊娠中、出産後4ヵ月、出産後1年と、男女ともに徐々に低下していくことが明らかになった。ここでは3つの尺度のうち、QMI(Quality Marital Index)を指標として、夫婦関係の評価と、男性の育児参加の評価の関連を調べる。

男性、女性、それぞれの調査において測定された男性の育児参加は、5項目からなる。それぞれの回によって質問項目は微妙に異なるが、それらを合計して、男性の子育て指数とした。これと、それぞれの回に測定されたQMIとの相関度を表2に示した。いずれの回においても、男性の育児参加の評価と夫婦関係の質とは相関することが明らかになった。

第四に、育児に積極的に参加する男性はどのような

表2 男性の育児参加度と夫婦関係(QMI)との相関

	第1回調査(妊娠中)	第2回(生後4ヵ月)	第3回(生後1年)
女性の評価	0.29**	0.36**	0.34**
男性の評価	0.22**	0.15**	0.12**

* p<0.05, ** p<0.01

表3 男性の育児参加度との相関係数

	年齢	-0.10**
就労状況	帰宅時間	-0.23**
	「仕事」にかかる時間配分	-0.27**
性役割分業観 (4件法)	「子どもが小さいうちは、母親は育児に専念したほうがよい」	0.08
	「夫は家事や育児を共同で分担した方がよい」	-0.19**

* p<0.05, ** p<0.01

属性と関連するかを明らかにした(表3)。まず、年齢と負の相関が見られた。つまり、年齢が若いほど、育児参加度が高いことを示している。また、就労状況とも負の相関が見られた。つまり、帰宅時間が遅いほど、あるいは仕事にかかる時間配分が高いほど、子育ての参加度は低くなる。さらに、性役割分業観について、4件法で尋ねた結果との相関を調べた。「夫は家事や育児を共同で分担した方がよい」という夫婦協働の考えを持つ男性ほど、子育ての参加度は高い。しかし、「子どもが小さいうちは、母親は子育てに専念したほうがよい」という、女性の家庭内中心の役割観との相関は見られなかった。つまり、女性の役割観とは一線を画した状態で、男性の参加度はある程度規定されていることがわかる。

第五に、出産時の参加と子育て行動の参加の関連性を調べた。すなわち、分娩時に立ち会った夫と、立ち会わなかった夫との間で、QMI値および、育児参加度の差の検定を行った。しかし、この両者の間に、有意差は見られなかった。

考 察

この結果は、仮説で挙げたように、男性の積極的な育児参加が、夫婦関係の質を向上させることが明らかになった。今回の調査に協力した対象者は、無償の研究協力という点でも、子育てに関する意識が夫婦双方とも高いことが考えられる。そのようなバイアスを持ったグループの中でも、男性の子育て参加と夫婦関係の質が相関することがわかった。父親の育児参加は、従来、どちらかと言えば、子どもに対する影響という観点から分析されることが多かった。今回の研究結果は、それとは多少異なった視点、つまり、夫婦関係の質に注目したが、その点でも、男性の子育て参加の重要性が確認された。

妊娠期から乳児期という時期は、その後の子どもが成長した時期に比べて、父親の出番は少ない。男性は、父親としてよりも、むしろ夫として、肉体的・心理的に過大な負荷が加わる妻に対するサポート役が求められている。フルタイムの仕事を持つ男性にとって、家

にいて多くの時間を子どもとともに過ごす妻に比べれば、直接育児に関わる機会が少ないかもしれない。しかし、その機会を逃さず、入浴補助やオムツ替えなど、具体的な育児行動に加わることが、女性にとって、育児を支援されているという大きな安心感に結びつくであろう。また、男性にとっても、育児を行うことによって、妻の役割の大変さ、重要性に気づくよいチャンスであり、それらの行動を通して、夫婦関係の協力的体制や、相互に対する思いやりなども深まると考えられる。

出産前、女性はそれほど夫の役割を期待していないにも関わらず、男性の意気込みは強い。従来の固定的な性役割観にとらわれない男性にとって、育児に参加しようとする心意気はむしろ自然な気持ちといえよう。一方の妻にとっても、育児行動に対する責任感が高まるのが妊娠期であるとすれば、出産後の子どものケアは当然女性自身の仕事であると考え、男性に期待する部分は少ないのかもしれない。

しかし、実際にふたを開けてみると、育児はそう容易ではない。出産前の男性の意気込みに比べると、実際の育児行動は量的に低下する。男性の育児行動が想像以上に困難である理由について、本研究の結果から考察する。

第一に、家庭外の役割が大きいことである。帰宅時間や仕事に費やす時間配分が育児参加の障害になっていることが今回の結果からも明らかになった。ライフサイクル上でも、20代後半から30代の男性たちは、雇用先をはじめ、社会の中での役割が増大する時期である。帰宅時刻が午後10時、11時といったケースも少なくない。このような状況では肉体的、心理的にも育児に振り分ける余裕は限られるであろう。

第二に、男女の役割分担意識である。男性自身も子育てに参加すべきという理念を持っている方が、育児参加への度合いも高かった。妊娠後期から第一子出産後1年以内に就労する女性はごくわずかである。母親は家において、男性がフルタイムの仕事に従事していれば、当然、家庭内・家庭外での役割も分化される。この時期は、その前後の時期に比べても伝統的な男女の役割分業が強まる時期である。女性の役割が育児で

あると規定していても、男性は積極的に育児に参加することもできる。男性の役割観をこれからの社会の中でどう規定していくかということが、今後の課題となる。

また、出産時の男性参加も重要である。今回の結果からは、立ち合い出産の有無が、直接その後の育児参加度や夫婦関係に影響するという仮説は否定された。しかし、子育て参加の第一歩として、出産体験を夫婦で共有することは、その後の育児行動の参加や、夫婦関係に肯定的な影響を与えることは十分に考えられる。この点について、さらに分析を加えることが必要である。

今後、男性が積極的に子育てに参加できるようにはどのようなことが必要であるか。今回の結果を踏まえて考察する。3つのレベルにわけて考える。社会的なレベル、個人的なレベル、そして関係性のレベルである。

社会的なレベルとして、男性の子育て参加を保証する社会的、法的処遇である。北欧など一部の社会では、父親の育児休暇が法律によって義務付けられている。

日本でも、男性の育児休暇は制度的には可能となったが実際にそれを利用している男性はごくわずかである。それは、個人レベルでの希望はあっても、会社組織の中で、それを利用できるだけの意識的コンセンサスが得られていないことが考えられる。せっかく与えられた権利を躊躇することなく享受できる社会的環境が必要である。また、フレックス・タイムの導入、あるいは、長時間労働の改善など、子育てに配慮した労働環境を整えることも必要である。

個人レベルとしては、男性自身の意識改革である。伝統的に男性たちに与えられた役割は就労など、家庭外の役割であった。それに加え、家庭内の役割を積極的に果たすことが重要であり、前者の役割を果たすために後者を犠牲にしたような以前の価値観を変革していくことである。

また、関係性のレベルとしては、夫婦双方が、お互いの役割分担の領域についてよく話し合い、合意することである。たとえば、男性が積極的に子育てに関わろうとしても、女性が伝統的な役割観のもとで、男性の参加を受け入れられないような場合、夫婦の機能は十分に果たされない。また、拡大家族からの影響なども受ける場合には、それらも考慮に入れた上での夫婦間のコンセンサスづくりが大切である。

男性の子育て参加を可能にするこれら、異なるレベルでの環境づくりは、簡単ではない。時間をかけて、ゆっくり整えていくことが必要である。

文 献

Shim, S (2004) Balancing work and family: A new paradigm for society. Proceedings of The 20th World Federation for Home Economics, 48-57.

朝日新聞東京版夕刊, 2004年8月7日

倉持清美, 中澤智恵, 田村毅, 及川裕子, 木村恭子, 岸田泰子 (2001) 妊娠期の夫婦の特徴: 第一次質問紙調査とインタビュー調査から。東京学芸大学紀要第6部門 53集 pp.73-81.

倉持清美, 田村毅, 中澤智恵, 及川裕子, 岸田泰子, 木村恭子, 森田千恵, 持田恭子, 荒牧美佐子 (2002) 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響(2): 質問紙自由記述から。東京学芸大学紀要第6部門 54集 pp.57-67.

及川裕子, 田村毅, 倉持清美, 中澤智恵, 岸田泰子, 木村恭子, 森田千恵, 持田恭子, 荒牧美佐子 (2002) 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響(3): 子育て教室の実践報告。東京学芸大学紀要第6部門 54集 pp.69-75.

田村毅, 倉持清美, 中澤智恵, 及川裕子, 岸田泰子 (2000) 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響についての予備的研究。東京学芸大学紀要第6部門52集 pp.27-43.